

幼稚園において楽しくきまりを身に付けるための指導法について

— 4 歳児の場合 —

二階堂年恵／合原 晶子

幼稚園教育要領解説によれば、規範意識の芽生えとは、幼児が人や物など周囲の環境と関わる中で、互いに気持ちよく過ごすために、感じ、考えて自分の気持ちや行動を調整（コントロール）しようとする心の動きであることが示されている。しかし、「内容の取扱い」の解説においては、保育者の子どもに対する関わり方が記述されているが、具体的な指導のあり方までの記述がなされていない。

本研究においては、幼稚園において規範意識の育成のため、寸劇を活用し、楽しく身に付けるための指導・支援のあり方（4 歳児の場合）について、提案した。

従来から保育者は規範意識の芽生えを育てるために、実際の教育現場で様々な教材を用いて指導をしている。使用されている教材は、市販されている既製のビデオや紙芝居等の保育教材や保育者自らが作成した教材、又ペーパーサートや腕人形を使用した寸劇等様々である。これらは、視覚や聴覚に訴えることが出来、子どもにとって親しみやすく理解されやすいと考える。

本研究では、保育者がストーリーを考え数人で演じる劇についての保育指導案を示している。

キーワード：幼児教育 Child Education 規範意識 Model Consciousness
人間関係 The Human Relations

1. はじめに

平成 20 年度改訂の幼稚園教育要領の領域「人間関係」において「規範意識の芽生えⁱ」が加わり、幼児期における規範意識に関する研究は増加してきている。しかしそれらは、幼児期における善悪判断の発達の特徴を明らかにしたものⁱⁱや、集団遊びの中で子どもたちがどのような時にどのような形でルールを破り、葛藤が生じるのか、その葛藤の中で子どもはどのように主張、或いは抑制をするのかⁱⁱⁱ、等の原理的研究が数多く見受けられるが、教育現場における実践的な指導のあり方については、個々の園に任せ、現在のところ確立した具体的な指針が

示されている現状ではなく、保育者の指導・支援はいかなるものかの十分な議論はされてきているとは言えない状況にある。

幼稚園教育要領解説によれば、「規範意識の芽生えⁱ」とは、「友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる^{iv}」ことと示されている。

幼稚園教育要領における規範意識に関する記



表1 幼稚園教育要領における規範意識育成に関する記述

2人との関わりに関する領域「人間関係」	
1ねらい	(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。
内 容	(9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。 (11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。
内容の取扱い	(4) 道徳性の芽生えを培うに当たっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、幼児が他の幼児との関わりの中で他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。特に、人に対する信頼感や思いやりの気持ちは、葛藤やつまづきをも体験し、それらを乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること。 (5) 集団の生活を通して、幼児が人との関わりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること。

文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、平成30年、pp.167-192より筆者ら抜粋・引用。

述を表1に示す。

このように、規範意識の芽生えとは、幼児が人や物など周囲の環境と関わる中で、互いに気持ちよく過ごすために、感じ、考えて自分の気持ちや行動を調整（コントロール）しようとする心の動きである。

つまり、きまりは保育者が言葉で伝えるより、子どもたちが友だちと関わる中で、相手の気持ちがわかるようになることで少しずつ身に付くものであり、保育者は、子ども同士がより良く関わり合えるような活動や、必要に応じて子どもたちの間に入り、働きかけることが求められているのである。

しかし、この「内容の取扱い」の解説においては、教師の子どもに対する関わり方が記述されているが、具体的な指導のあり方までの記述がなされていない。

なお、保育所保育指針、幼保連携型認定こ

ども園教育・保育要領にも、幼稚園教育要領のものとはほぼ同様の規範意識に関する記述があるが、幼稚園教育要領の解説と同様、抽象的な理念の記述のみで、具体的な指導・支援のあり方についての記述はなされていない。

本稿においては、規範意識の育成のための具体的指導・支援のあり方について、寸劇を活用し、幼稚園において楽しく身に付けるための指導・支援のあり方（4歳児の場合）^vについて、提案したいと考える。

2.4 4歳児の規範意識に関する発達の特性

規範意識の育成に関して、Turielは、道徳的な判断や行動の基盤となる社会的知識は、質の異なる「社会的慣習」領域、「道徳」領域、「個人」領域という3つの独立した思考領域から構成され、それらは別々の発達過程をたどるとした。また森川氏は、3歳から5歳の幼児期に焦



点を当て、幼児の「社会的慣習」違反と「道徳」違反に対する善悪判断、及びその理由付けの検討を通して、幼児期における「社会的慣習」と「道徳」の概念区別や、善悪判断の発達の特徴を明らかにしている。

森川氏によれば、幼児の社会規範に対する理解は3歳頃から既に始まっており、保育者はその点を踏まえた支援・指導をする必要があるということ、これまで子どもの道徳性の発達については、ピアジェやコールバーグが、他律から自立へあるいは慣習から道徳へという一元的な発達モデルを提唱してきており、それらの理論に基づいた道徳教育が多く教育現場で実践されてきたが、Turiel が指摘するように、子どもは幼児期から既に「社会的慣習」や「道徳」等の領域に基づいた理由付けを用いて、多角的な判断をしている可能性を示唆している。

したがって、保育者は、3歳頃から「社会的慣習」違反や「道徳」違反等の社会規範の善悪判断とともに、その理由についても領域や年齢段階に即して説明したりする等の支援や指導が必要であるとしている。その際、「公園にゴミを散らかす」や、「人の嫌がることを言う」のように、違反行為の影響が他者を精神的に傷つけるような目に見えにくいものであったり、違反に対して相手からの直接的な反応がなく、その影響が分かりにくいものであったりする場合もあり、そのような場面については、3歳頃は「きまり（社会的慣習）」や「人としてしてはいけないこと（道徳）」等の規準を用いながら事の善悪を指導し、4、5歳頃にかけて徐々に他者や環境等への影響について説明していく等、幼児の発達段階に合わせた工夫も必要になるとしている。^{vi}

特に4歳からは、子どもたち個々が好きな遊びをしていた3歳の頃とは違い、集団で遊べるようになることが特徴的で、様々な遊びのきま

りを理解しながら、取り組めるようになる時期である。^{vii} また、4歳児は友だち関係が深まる一方で、自分の感情はまだうまくコントロールすることが出来ないため「4歳の壁」と言われるように、反抗的な態度や、成長が逆戻りしたような行動が出てくることもあり、自分と相手との思いがすれ違ってけんかが増える時期でもある。しかし、けんかをして自分の気持ちを表したり、相手の気持ちに気付いたりする経験も大切なのですぐに止めずに様子を見守ることも重要である。

例えば、「やってはいけません」や、「おもちゃを貸してあげなさい」という、保育者からの簡単な指示には従うことが出来るようになると共に、大人の要求に応えることに喜びや誇りを感じるようになるが、4歳になると自意識が芽生えるので、保育者は、子どもへの言葉がけを出るだけ減らし、子どもが主体的に考え、行動できるような環境を整えなければならない。^{viii}

東京都教育委員会では、規範意識の芽生えに關しての発達の道筋と、発達に応じた大人の関わりで大切にしたいことを明らかにしている。（表2を参照）



表2 規範意識の芽生えに関する発達の道筋、及び大人の関わり（3歳児～5歳児）

視 点	3歳児 大人と一緒にきまりを守る体験を	4歳児 相手の気持ちに触れる体験をたっぷりと	5歳児 みんなと一緒に生活することの楽しみを基に、自立に向けて応援を
きまり ルール マナー等	<ul style="list-style-type: none"> 生活や遊びの中には、安全のためなどに必要なきまりがあることを知り、それを守ろうとする。 みんなで使う物があることが分かり、一緒に使おうとする。 遊具や用具の貸し借り、交代や順番待ちの際に、必要な言葉を使う。 大人の手伝いをすることを喜ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 同年齢の子どもと楽しく生活する中で、きまりの大切さに気づき、守ろうとする。 安全のために必要なきまりや行動の仕方が分かり、自分から行おうとする。 簡単なルールを守って遊ぶ楽しさを味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> 同年齢の子どもと一緒に遊びを発展させる中で、自分たちで遊び方やきまりを作り出し、守って遊ぶ。 安全のために必要なきまりが分かり、遊びや生活の中で、危険なことを自分で判断する。
大人の関わりで大切なこと	<ul style="list-style-type: none"> やってよいことと悪いことがあることをその都度知らせる。悪いことをした時には、どこが悪かったのかを伝え、きちんと叱る。 「貸して」等の言葉や交代、順番等のきまり等、子ども同士で活動する上で必要なことを伝え、大人と一緒に行動しながら、徐々に自分で出来るようにしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> けんかの場面では、双方が相手の思いにも気付けるように大人が仲介する。その子どもの気持ちを受け止めて心を落ち着かせたり、その後どうしたらよいかを一緒に考えたりして、気持ちを切り替えて遊べるように支える。 子どもが自分で行おうとしている気持ちを尊重し、大人が先に指示したりせずに暖かく見守り、出来たことを共に喜ぶ。 ルールがある遊びを大人も一緒にしながら、その楽しさや負ける悔しさなどを共に味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びや友達関係がうまくいかない場面では、子どもが、様々な出来事や感情に向き合いながら乗り越えていけるように、一緒に考え支えていく。 自分で考えて判断し、発言したり行動したりする姿を認めていく。 日常の生活の中で、交通安全や地域社会のルールについて考える。



以上のことから、本稿においては以下の点を元に指導案を作成することにした。

①→きまりについて楽しく学べるようにする

寸劇を通して、子どもたちが楽しく、客観的にきまりにふれることが出来るように工夫をする。特に4歳児では、きまりは分かってはいる一方で、まだ自分の気持ちをコントロール、制御することが出来ないこともあるので、言葉でのやりとりだけでなく、保育者の寸劇で視覚的に示すことにより、当事者両方の気持ちをより理解出来るようにする。楽しくきまりにふれながら、その大切さを伝えていくことで、子どもの中にきまりを守ろうという意識が芽生えるのである。

②→保育者は子どもたち、子ども自身の葛藤に寄り添う

子どもたち、子ども自身、きまりの大切さが分かりつつも、相手との、また自分の気持ちとのせめぎ合いが生まれることもある。保育者が子どもたちの葛藤している心に寄り添って受け止めることで、子どもたちは安心して自分の言動を振り返り、考えることが出来るようになるのである。きまりに納得して、自分の心に折り合いをつけられるように、保育者は、子どもたちの状況に応じて「〇〇くんはこう思ってたんだよね」というように子どもの気持ちに共感したり、「〇〇くん（相手）はどんな気持ちだったと思う？」と相手の立場に立って、自分の行動を振り返るよう促す等の声かけをしたり一緒に考えたりする。

③→子ども同士の伝え合いを認めて、保育者はそれを支える関わり方をする。

問題を解決するために、子どもたち自身が試行錯誤することで、きまりを守ることの大切さがわかってくるようになる。保育者はすぐに子どもたちの中に入って仲裁するのではなく、状況を見守りつつ、適切に声をかけて話し合いを

整理しながら子どもたちを支えていく。つまり、保育者は、子ども同士がしっかりと話し合いをし、言葉で思いを伝え合う環境を整える。

3. 保育の場で使用されている教材とその指導方法

従来から保育者は規範性の芽生えを育てるために、実際の保育の場で様々な教材を用いて指導をしている。使用されている教材は、市販されている既製のビデオや紙芝居等の保育教材や保育者自らが作成した教材、またペープサートや腕人形を使用した寸劇等様々である。これらは、視覚や聴覚に訴えることが出来、子どもにとって親しみやすく理解されやすいと考える。

ここでは、保育者がストーリーを考え、数人で演じる劇についての保育指導案を示す。

保育指導案

- 1 対象年齢：4歳児
- 2 活動名：「みんなで一緒に考えよう」
- 3 活動のねらい：身近におきた現実の出来事をもとに、保育者の劇を見ながらきまりの必要性やきまりを守ることの大切さについて学ぶ
- 4 活動の留意点
 - ・実際に起きた出来事を保育者が役割に分かれて演じることで、子どもに気付いてほしいことを分かりやすくする。
 - ・保育者は演じながら子どもたちからの発言を取り入れたり、発問をしたりしながらやりとりの中で応答的に活動を進めていく。
 - ・子ども自らが考える場面を意図的に設定して、保育者の演じる姿の中に自分を同化させながら学ぶことができるようにする。
- 5 活動の流れ

当日のエピソード

園庭のブランコで遊んでいるA子にB子が



「代わって！」と言ったが、「いやよ！私まだ使いたいんだもん。」と言ってなかなか代わろうとしなかった。B子は「でもA子ちゃんはさっきからずっと使っていたから、もう代わってよ。」と言ったが、「じゃあ10数えたら代わ

るよ。」と言い2人で10まで数えたがA子はなかなかブランコから降りようとしなない。B子はとうとう泣き出してしまった。それを見てA子はそっとブランコから降りてその場から離れた。

6 表3 評価の観点と保育者の手立て

評価の観点	保育者の手立て
・子どもたちが、当事者両方の思いを理解することが出来ていたか。	・言葉でのやりとりだけでなく、保育者の寸劇で視覚的に示すことにより、当事者両方の気持ちをより理解出来るようにする。
・子どもたちは、トラブルを解決する中できまりの必要性やそれを守ることの大切さに気付いていたか。	・4歳児の主体性を大切にしながら、なぜトラブルになったのかを子どもたち同士で考えるように促し見守る。

7 表4 本時の活動

活動の主な流れ	予想される子どもの反応	保育者の留意点
○帰りの会が始まる。 ○今日の一日を振り返る。	○楽しかったことや困ったことやケンカをしたこと等を発表する。	○一日の生活を子どもたちと一緒に振り返り、子どもの気持ちに共感したり、一緒に考えたりどうしたらよいかを話し合ったりする。
○自由遊びの時間にA子とB子の間で起きた出来事を2名が寸劇で再現するのを見る。	○「A子ちゃんが代わってあげなかったのを見たよ。」「B子ちゃんが泣いてたよ。」等と言う子どもがいる。	○どちらかの特定の子どもが悪いというイメージをもたせないように、みんなで一緒に考えてみようという流れをつくる。
○エピソードの寸劇を見てみんなで話し合う。	○A子、B子がそれぞれの気持ちについて発言する。	○まずはそれぞれの気持ちに気付かせ、自分だったらどうするかを考えてみるようにする。
○2人はどうすれば良かったのかを考えて話し合う。	○自分なりの考えを発言する子どもがいる。	○担任は中立の立場で、子どもたちにこの場面について思ったことを正直に言えるように聞いてみる。



<p>○互いに気持ちよく遊ぶために「きまり」があることや、きまりを守ることの大切さについて聞き、理解する。</p> <p>○ブランコの場面での「きまり」をみんなで考えて決める。</p> <p>○子どもたちから出た意見をもとにして、保育者が「きまり」に着目して再度望ましい姿を演じて見せる。</p> <p>○明日からの遊びを楽しみにする。</p>	<p>○保育者の話を一生懸命に聞いている。</p> <p>○子どもたちから色々な発言がある。</p> <p>○うなずきながら安心した表情で寸劇を見ている。</p>	<p>○子どもたちの気持ちをしっかりと受けとめ共感していく。</p> <p>○2人の気持ちや他の子どもたちの思いを受けとめた後に、この場面ではどうすれば良かったのか、子どもと一緒に考えていく。</p> <p>○子どもたちから出た意見の中から、遊びや生活の中には「きまり」があることや、「きまり」を守ること、守らないことによって起きるトラブルについて気付かせていく。</p> <p>○保育者が一方的に全てを決めるのではなく、子どもたちの意識の中から引き出していく。</p> <p>○最後に望ましい姿を演じて見せることで安心感をもたせ、次からの行動に規範意識を取り入れることが出来るように自覚を持たせる。</p>
--	---	--

(合原作成)

本指導は、幼稚園4歳児を対象とし、幼稚園教育要領第2章第2節の2、人との関わりに関する領域「人間関係」に基づいた内容として位置付けている。

まず、4歳児のクラスで、一日の終わりでいう、「帰りの会」で、子どもたちに今日一日を振り返ってもらう。子どもたちに、今日あった楽しかったことや、困ったこと、ケンカをしたことを発表してもらう。保育者は、子どもと一緒に一日を振り返り、子どもの気持ちに共感したり、困ったことがあると一緒に考えたり、ど

うしたらいいか話し合ったりする。

そこで、「A子ちゃんがブランコをB子ちゃんに代わってあげなかったのを見たよ」、「B子ちゃんが泣いていたのを見たよ」と言う子どもたちの発言を受け、自由遊びの時間にA子とB子の間で起こったトラブルについて2名の保育者が寸劇で再現する。その時、どちらかの特定の子どもの悪いというイメージを持たせないように、みんなで考えようという流れを作る。

エピソードの寸劇を見て、A子、B子がそれぞれの気持ちについて発言し、みんなで話し合



い、それぞれの気持ちについて気付かせ、自分だったらどうするかを考えてもらうようにする。

続けて、保育者は、「2人はこの時どうすれば良かったかな？」子どもたちに考えさせて話し合いをしてもらう。そこで自分なりの考えを発言する子どもたちがいるので、そのような子どもたちの気持ちをしっかりと受け止め、共感した後で、この場面ではどうすれば良かったのか、子どもたちと一緒に考えていく。

その後、子どもたちから出た意見の中から、互いに気持ち良く遊ぶためには「きまり」があることや、「きまり」を守ること、守らないことによって起きるトラブルについて気付かせていく。そこで、保育者は、ブランコの場面での「きまり」をみんなで考えて決めさせる。子どもたちから色々な発言が出るが、保育者はそこで一方的にすべてを決めるのではなく、子どもたちの意識の中から引き出していく。

最後に保育者は、子どもたちから出た意見を

もとにして、「きまり」に着目して再度望ましい姿を演じて見せ、そのことによって子どもたちに安心感を持たせ、次からの行動に規範意識を取り入れることが出来るように自覚を持たせ、明日からの遊びを楽しむにする。

この指導案は、映像や紙芝居という非現実的なものではなく、身近な先生が園での出来事その日のうちに再現して子どもと一緒に考えることができる良さがある。4歳児は、自分の身の回りで起きた出来事についてかなり理解は出来るが、まだ子ども同士で解決することは困難であり、自分の思いを通そうとする時期である。

そこで、今回のように遊びの中で起こるトラブルを具体的に示し、「何が問題なのか」、「どのように解決すればよいのか」、「きまりはなぜ必要なのか」等を子どもと一緒に話し合う中で規範意識の芽生えを育むことが大切だと考えた。そのためには保育者の適切な支援が必要であり、子どもの気持ちに寄り添いながらきまりを守ることの大切さに気付かせ、更には日常生

保育者の規範意識育成における適切な支援・援助について

◆子ども同士のトラブルにおけるお互いの気持ちを考える支援・援助を行う場合

①→子どもの気持ちに共感する

トラブルの状況に応じて、「A子ちゃんはこのように思っていた／考えていたんだね」



②→相手の視点に立って自分のとった行動について振り返るように促す

「A子ちゃんがやったことに対して、B子ちゃんはどう思った／考えたと思う？」



③→子ども同士のプロセスを見守り、介入しすぎないようにする

「じゃあ、どうしようか？」

子どもたちが自分たちの気持ちを調整してトラブルを解決したり、また一緒に行動するためにどのようにするのが良いのか考えたり子ども同士のプロセスを見守り、介入しすぎないようにする。



④→子どもたちの気持ちを理解して折り合い、きまりの必要性を気付かせたり調整を付けようとする子どもを認める



活の中で身につくように根気強く指導していく必要性を感じる。そのためにも、保育教材の在り方や使い方については今後も検討していく必要があると考える。

このように保育者が主導となって「教える」のではなく、子どもたちが自発的に遊びに向かい、小学校以降も子どもたちが持つ資質・能力を育んでいけるよう、学びの基礎を形成することが重要になってくる。

幼児期の段階での規範意識の育成とは、完璧にきまりを守れるように育てることが狙いではなく、子ども自身が園での集団生活や、様々な遊びの中できまりがあることや、きまりの必要性に気付かせること、その意味するところを理解した上で、子どもなりに守ろうとするために自分の気持ちを調整しようとする力を育むプロセスを重視した支援・援助をすることで、「友だちと一緒に遊べて楽しかった」、「次は、こういうふうにやってみたい」等と友だちとの関わりが深まっていき、次回からA子は、自分で自分を抑制し、友だちと楽しく園での生活や遊びをすることになっていくことである。

そして、友だちと楽しく幼稚園での生活や遊びをするためにきまりがあることが理解出来た上で、必要に応じて作り変えたり、新たに作ったりして工夫して、そのきまりを守っていくことである。そうすることによって、子どもたちが共同で使用するものに対して、自他の要求に対して折り合いを付け、大事に扱うようになり、友だちとも楽しく遊ぶことが出来るようになるのである。

4. 今後の課題

今回は、4歳児において寸劇を活用した支援・援助のあり方について検討したが、今後は、ICTを活用して、楽しくルールにふれる支援・援助のあり方について検討したい。特に次回検

討したいと考える3歳児においては、きまりについてはわかっている一方で、まだ自分の気持ちに折り合いをつけることや、調整することが出来ないこともあるので、楽しくきまりに触れながら、その大切さを一度だけでなく、繰り返し伝えていくことで、子どもたちの中で、きまりを守ろうという意識が芽生えるような指導・支援について検討していきたい。

【参考文献】

- ・櫻井国芳他「道徳・規範意識の芽生えを意図した保育教材の開発」『福岡県立大学人間社会学部紀要』Vol.26, No.2, 2018年、pp.151-161。
- ・汐見稔幸、中山昌樹『10の姿で保育の質を高める本』風鳴舎、2019年。
- ・花城由紀子「幼児の規範意識の芽生えを培うための援助の工夫～身近な人とのかかわりを通して～」city.uruma.lg.jp/
- ・廣瀬三枝子・藤村裕一「幼児期の直接的な体験を補完・促進・充実させるICT活用教育の在り方」『日本教育工学会研究報告集』2021巻2号、2021年、pp.152-157。
- ・森川敦子他「子どもの規範意識の育成－保育者のかかわり方に焦点づけて－」『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』第3号、2017年、pp.78-87。
- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館、2018年。
- ・文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2018年。
- ・厚生労働省編『保育所保育指針解説』フレーベル館、2018年。

**【引用文献】**

- i 本研究では「規範意識」とは、「法令などの社会のきまりの大切さを理解し、それらを守ろうとする意識」とし、「規範」とは、社会のきまり（交通ルールや公共の場での約束事等）としている。詳しくは、東京都教育委員会『きまりをまもるこころを育てる－幼児期の「規範意識の芽生え」の醸成指導資料－』平成 26 年、p.7 を参照。
- ii 森川敦子他「子どもの規範意識の発達に関する研究－幼児の善悪判断の理由付けに焦点づけて－」『比治山大学紀要』第 23 号、2016 年、pp.121-131。
- iii 長田紗季他「集団遊びにおける年長幼児のルールを破る行為とその内容－規範意識の育ちにつながる子どもの葛藤に着目して－」『富山大学人間発達科学部紀要』第 15 巻第 1 号、2020 年、pp.49-59。
- iv 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレール館、2018 年、p.60。
- v 2018 年の法と教育学会において、幼稚園において楽しくきまりを身に付けるための指導法について（5 歳児の場合）について発表させていただいた。
- vi 森川敦子他「子どもの規範意識の発達に関する研究－幼児の善悪判断の理由付けに焦点づけて－」『比治山大学紀要』第 23 号、2016 年、pp.129。
- vii サラジョブ <https://solasto-career.com>
- viii ほいく is <https://hoiku-is.jp>



Teaching Methods for Fostering Norm Awareness with Fun Kindergarten Rules – The Case of 4-Year-Old Children –

Toshie Nikaido

Akiko Gohara

The “emergence of norm awareness” concept was introduced in the 2008 revised Kindergarten Education Guidelines under the “Human Relationships” domain, resulting in increased research on norm awareness during early childhood. However, despite the abundance of theoretical studies, there has been insufficient discussion on how educators can effectively guide and support norm awareness of young children. This study proposes an approach to fostering norm awareness in kindergarten, specifically targeting 4-year-old children, using skits to make learning rules enjoyable and engaging. Skits are chosen for their ability to appeal to children’s visual and auditory senses, making them more accessible and understandable. Firstly, in the 4-year-old class, at the end of each day during the “end-of-day gathering,” children are encouraged to reflect on their day. During this time, two educators use a skit and reenact problem situations between children A and B during free play. Following the skit, educators engage the children in discussion, prompting them to consider how they could have acted differently in that situation. Subsequently, based on the children’s input, educators draw attention to the essential role of “rules” for playing harmoniously and highlight the consequences of not following rules. Here, educators facilitate a collective decision-making process among the children to establish the “rules” for such situations. Finally, educators perform a skit based on the agreed “rules,” emphasizing the desired behavior, instilling a sense of security in the children, and encouraging them to incorporate norm awareness into their future actions. At age 4, children can understand events in their immediate surroundings but may find it challenging to resolve conflicts independently, often asserting their desires. Therefore, it is crucial to concretely demonstrate and discuss problems that arise during play and nurture the development of norm awareness through dialogue with children. This approach entails recognizing the significance of adhering to rules while empathizing with children’s emotions and providing patient guidance. To achieve this goal, future studies must further examine the format and utilization of teaching materials in early childhood education.